

個人レポート

『源氏物語』の本文と英語訳の 生活・文化の表現の違いについて

竹 内 理 穂

1. はじめに

現在『源氏物語』というものはさまざまな言語に翻訳されているが、とりわけ英語訳は重ねて試みられている。

本論では、英語訳を通して『源氏物語』が、英語圏の人々にどう受け入れられているのか、さらに、どのように表現されているのかについて考えてみたい。今回は次のような2つの問題を提起する。

(1) 『源氏物語』は書かれた当時の平安時代の生活様式や文化などが描かれている。それは現代日本における生活様式や文化とは大きく異なっていることが多い。そのため、ある程度の共通点が見られる日本人でも、理解が難しい場合がある。そんな中で生活様式や文化がさらに大きく異なる西洋人に向けての翻訳はどのようなものになっているのか。

(2) 『源氏物語』に描かれている当時の生活様式・文化を翻訳する際に使用された英単語・英熟語が一体どのようなものなのか、また使われた英単語・英熟語の意味と、日本語での現代語訳の意味との間に一体どれくらいの差違があるのか。

なお、本論で取り上げた訳者は次の通りである。

- ・末松謙澄 『GENJIMONOGATARI』1974 Rutland
- ・アーサー・ウェイリー (Arther Waley) By Lady Murasaki, translated from the Japanese by Arthur Waley. 『The Tale of Genji』Modern Library 1960
- ・エドワード・サイデンステッカー (Edward G Seidensticker) Murasaki shikibu, translated with An introduction by Edward G.Sidensticker 『The tales of Genji』1978

ここでいう英単語・英熟語と日本語の現代語訳の差違というのを、巻頭の最初の巻としての「桐壺」というワードを例に挙げて説明すると下記ようになる。

また語句の説明に、日本語は日本国語大辞典、英語はジーニアス英和辞典からの引用を使用する。

「桐壺」の英語訳はそれぞれ

<末松謙澄>

THE CHAMBER OF KIRI

< Waley >

KIRITUBO

< Seidensticker >

The Paulownia Court

と翻訳されている。ウェイリー氏のものは KIRITUBO と英語表記になっているのみなので、ここでの考察は省略する。

まず、「桐壺」そのものの意味としては「(中庭に桐が植えてあるところから) 宮中五舎の一つ、淑景舎をいう。」である。

次に末松氏の訳に使われている「Chamber」及び、サイデンステッカー氏の訳に使用されている「Paulownia」と「Court」について説明する。

- Chamber ■名詞
- 1 a 議会 議員会館
 - b 会議室 会議所
 - 2 a 特別に用いる大きい部屋
 - b (宮廷などの) 公式の間
 - c 判事室
 - d バリスターの事務室
 - e 収入事務室
 - 3 a 室 部屋
 - b 私室 寝室
 - c 一続きの部屋 貸間 アパート
 - d 囲まれた空間 仕切られた部屋 空洞

Paulownia ■名詞 [植] キリ 《ゴマノハグサ科キリ属 (Paulownia) の樹木の総称：特にキリ》

- Court ■名詞
- 1 法廷 裁判所
 - 2 a 宮廷 王宮 皇居
 - b 君主の催す会議 御前会議
 - 3 a (建物などに囲まれた) 中庭、空地
 - b (博物館などの) 陳列場
 - c (テニスなどの) コート

先に挙げたように、Paulownia は「桐」を指し、Chamber と Court はそれぞれ 3 d と 3 b の「囲まれた空間」といった意味により、「桐壺」を的確に訳すことができているのではないだろうか。

また末松氏の THE CHAMBER OF KIRI という訳については以下のように注釈がついていた。

The beautiful tree, called Kiri, has been named Paulownia Imperialis, by botanists

(訳 Paulownia Imperialis という英語名を持つ桐と呼ばれている美しい木)

このようなやり方で、『源氏物語』に描かれている古来の生活様式や文化が、英訳されることでどのように変化していくかを見ていこうと思う。

2. 「桐壺」の巻における比較

今回は「桐壺」の中でも特に主人公の袴着の場面をとりあげて、本文と英訳とを比較していく。なお、以降本文としての現代語訳は『新編日本古典文学全集』に拠る。

はじめに、「桐壺」の巻の梗概を確認しておく。源氏誕生～12歳の時の内容である。「桐壺」では、まず始めに源氏の母である桐壺の更衣が帝から寵愛を受ける様や、それにより弘徽殿女御をはじめとした他の女御・更衣から憎まれ、いじめにより病気を患い、源氏が3歳の時に亡くなってしまふことが書かれている。また更衣亡き後、桐壺帝は桐壺更衣に生き写しの内親王藤壺宮を迎えたり、高麗人に源氏の将来を占わせたところ、国の帝王に上る相が出ているが、そうすると世が乱れ民が苦しむとの結果を受け、臣下の身分にして源氏の性を与えた。源氏自身のことについては、12歳で元服し、左大臣の娘である葵の上と結婚するが、彼は継母の藤壺宮に思いを寄せている様子が描かれている。

今回対象の箇所として「桐壺」の巻を選んだ理由を次に述べる。

「桐壺」は『源氏物語』最初の巻であり、源氏自身のことよりも、源氏の母である桐壺更衣や父である桐壺帝のことについてがある種中心であったりし、これから始まる『源氏物語』の世界というものが一体どういう世界であるのかが語られているように感じられる。『源氏物語』の生活様式や文化などもわかりやすい巻なのではないだろうか。

3. 各英語訳との比較

「源氏の三歳の誕生日、袴着の儀式を行う場面」を使い、比較を行う。

<新編全集本文及び訳>

この皇子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮奉りしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くしていみじうさせたまふ。それにつけても世の誹りのみ多かれど、この皇子のおよすけもおはする御容貌心ありがたくめずらしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず。ものの心知れたまふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目をおどろかしたまふ。(21頁)

[この若宮が三歳におなりの年、御袴着の儀式を、さきの一の宮がお召しになったのにも劣らぬように、内蔵寮や納殿の財物のありたけを用いて、盛大にとり行わせられる。こうなされるにつけても、世間の非難がまことに多いけれども、この若宮の成長していかれるにつれてととのってゆくお顔立ちやご気性が、世にたぐいなく見るからに並はずれていらっしゃるの、どなたも憎しみ通す

ことなどとてもおできになれるものではない。ものの情理をわきまえていらっしゃる人は、このようなお方がよくもこの世に生まれておいでになったものよと、ただ呆然と目をみはっていらっしゃる。]

< 末松謙澄 >

When the young prince was three years old the Hakamagi took place. It was celebrated with a pomp scarcely inferior to that which adorned the investiture of the first Prince. In fact, all available treasures were exhausted on the occasion. And again the public manifested its disapprobation.

< Waley >

The young prince was now three years old. The Putting on of the Trousers was performed with as much ceremony as in the case of the Heir Apparent. Marvelous gifts flowed from the Imperial Treasury and Tribute House. This too incurred the censure of many, but brought no enmity to the child himself; for his growing beauty and the charm of his disposition were a wonder and delight to all who met him. Indeed many persons of ripe experience confessed themselves astounded that such a creature should actually have been born in these latter and degenerate days.

< Seidensticker >

When the young prince reached the age of three, the resources of the treasury and the steward's offices were exhausted to make the ceremonial bestowing of trousers as that for the eldest son. Once more there was malicious talk; but the prince himself, as he grew up, was so superior of mien and disposition that few could find it in themselves to dislike him. Among the more discriminating, indeed were some who marveled that such a paragon had been born into this world.

比較するにあたって、新編全集に載っているこの箇所を現代語訳を大きく三つに分類したい。

まず、御袴着の儀式の盛大さを表しているこの部分を次の①～③とする。

①「この若宮が三歳におなりの年、御袴着の儀式を、さきの一の宮がお召しになったのにも劣らぬように、内蔵寮や納殿の財物のありたけを用いて、盛大にとり行わせられる。」

次に、帝の特別な寵愛ゆえに、世間から非難されつつも、源氏の素晴らしさを表している部分である、

②「こうなさるにつけても、世間の非難がまことに多いけれども、この若宮の成長していられるにつれてととのってゆくお顔立ちやご気性が、世にたぐいなく見るからに並はずれていらっしゃる

るので、どなたも憎しみ通すことなどとてもおできになれるものではない」

最後に、ものの情理をわきまえている人が、源氏の素晴らしさゆえに彼の誕生に呆然としている場面を

③「ものの情理をわきまえていらっしゃる人は、このようなお方がよくもこの世に生まれておいでになったものよと、ただ呆然と目をみはっていらっしゃる。」。

ウェイリー氏・サイデンステッカー氏のものが、それぞれ細かい違いなどはあるが、①・②・③まですべて英語訳しているのにたいして、末松氏の英語訳の内容はほぼ①のみで構成されている。しかし①の部分も、「内蔵寮」「納殿」は省略されている。②については「こうなさるにつけても、世間の非難がまことに多いけれども、この若宮の成長していかれるにつれてととのってゆくお顔立ちやご気性が、世にたぐいなく見るからに並はずれていらっしゃるの、どなたも憎しみ通すことなどとてもおできになれるものではない」から「世間の非難がまことに多い」という箇所のみが訳されている。③については一切触れられておらず、すぐに「In the summer of the same year the Kiri-Tsubo-Koyi become ill,」と原文の「その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、～」の個所が変わってしまう。この次の部分はかなり細かく英訳されているようなので、末松氏は次の部分の内容を重視し、こちらは「儀式は盛大に執り行われた。結果、世間から非難された」という内容にのみ重きを置き、簡潔にまとめ上げて英訳したのだらうと思われる。

また、末松氏の英訳には「Hakamagi」について下記の注釈がついていた。

The Hakamagi is the investiture of boys with trousers, when they pass from childhood to boyhood. In ordinary cases, this is done when about five years.

(Hakamagi とは、彼らが子供時代から少年時代への変化の時に渡される、ズボンの形状の男子の衣服であり、この儀式は、通常の場合、五歳の頃行われる。)

ウェイリー氏・サイデンステッカー氏それぞれの英語訳については、先ほど述べたとおり、表現の違いこそあれど、どちらとも①・②・③全て英訳されている。

末松氏の英訳には、

- ・「Hakamagi」
- ・①は比較的細かく描写がなされている。
- ・「内蔵寮」「納殿」は省略
- ・②は「世間の非難がまことに多い」という箇所のみ
- ・③の部分は省略されている。

といった特徴がみられた。以上の五つのポイントを比べた違いとしては以下のものを挙げることができる。

<ウェイリー氏>

・「Hakamagi」については、「袴着」というように固有名詞を使用せず「The Putting on of the Trousers was performed with as much ceremony as in the case of the Heir Apparent.」と袴着

の儀式について細かく述べている。

- ・①について、「さきの一の宮がお召しになったのにも劣らぬように」に当たる表現が見当たらない。
- ・「内蔵寮」「納殿」はそれぞれ「the Imperial Treasury」「Tribute House」
- ・②については、「世間の非難がまことに多い」という箇所以外にも、「This too incurred the censure of many, but brought no enmity to the child himself; for his growing beauty and the charm of his disposition were a wonder and delight to all who met him.」とすべて訳されている。
- ・③の部分もすべて訳されている。

<サイデンステッカー氏>

- ・「Hakamagi」については、ウェイリー氏のものと同じく、「袴着」というように固有名詞を使用せず「the resources of the treasury and the steward's offices were exhausted to make the ceremonial bestowing of trousers」と儀式について細かく述べられている。
- ・①について「さきの一の宮がお召しになったのにも劣らぬように」に当たる表現は「as that for the eldest son.」
- ・「内蔵寮」「納殿」の表現がない。
- ・②については、ウェイリー氏のもと同じように、「Once more there was malicious talk; but the prince himself, as he grew up, was so superior of mien and disposition that few could find it in themselves to dislike him.」とすべて訳されている。
- ・③の部分もすべて訳されている。

これらのことから、三つの訳の中で特に大きな違いを持っていた、①の部分の

- ・ウェイリー氏・サイデンステッカー氏の「Hakamagi」の訳の違い・・・Ⅰ
- ・「さきの一の宮がお召しになったのにも劣らぬように」に当たる表現の有無・・・Ⅱ
- ・「内蔵寮」「納殿」の表現の有無・・・Ⅲ

について、それぞれの単語の日本語の意味・英語での意味両方をまとめながら着目していきたい。

Ⅰ. 袴着 幼児から少年少女に成長することを祝って、初めて袴をつける儀式。年齢は家庭の事情により一定し

ないが、もっぱら三歳から七歳までに行なった。

Waley

Trouser ズボン

Heir 1. 相続人
2. 後継者

Apparent 生まれながらの継承権を有する

seidensticker

Exhaust 疲れさせる 使い果たす

ceremonial 儀礼 儀式

bestow 授ける 贈与する

これらの日本語・英語両方の単語の意味を踏まえても、多少の違いこそあるが、どちらの文章も「袴

着」の意味をきちんと表している。しかしウェイリー氏のものよりもサイデンステッカー氏のもののほうが、「exhaust」を使用するなど、儀式がいかに大きく盛大なものであったのかを表現している。

また、Ⅲにかかわることだが、サイデンステッカー氏のもの「内蔵寮」「納殿」の表現がないと考えていたが、the treasury and the steward's offices がこれにあたるのではないだろうか。

Ⅱ. 「さきの一の宮がお召しになったのにも劣らぬように」に当たる表現

こちらの表現は、ウェイリー氏のものには見当たらないので、末松氏・サイデンステッカー氏のもので比較を行う

末松氏

scarcely inferior to that which adorned the investiture of the first Prince.

Inferior 劣った investiture 1 授与式 adorn 1 ～で飾る scarcely ほとんど～ない

2 衣装

2 ～に美観を添える

Seidensticker

as that for the eldest son

eldest 最年長の、一番年上の

以上の単語の意味から、末松氏・ウェイリー氏の訳ともに変化はないと考えられる

Ⅲ. 前述したとおり、サイデンステッカー氏のもの「内蔵寮」「納殿」の表現は、the treasury and the steward's offices なのではないだろうか。以下「内蔵寮」「納殿」の意味は新編日本古典文学全集に拠る

内蔵寮 中務省に属し、宝物・献上品などを管理した役所

納殿 宮中代々の御物を収める所。宜陽殿にあった。

末松氏

内蔵寮 the Imperial Treasury 納殿 Tribute House

Imperial 皇帝の、天皇の Treasury 宝物庫 Tribute 貢物

Seidensticker

Steward 給仕 office 事務所、離れや（納屋）

treasury は宝物庫と意味であるし、サイデンステッカー氏の訳において内蔵寮を意味しているのは間違いがないだろう。給仕も「貴人に仕える人」という意味合いがあり、その人の「事務所」と考えれば steward's offices も納殿の意味合いと近くなってくるのではないだろうか。

4. おわりに

今回、末松氏・ウェイリー氏・サイデンステッカー氏の英訳を比較してみて、使用する単語の違いや、省略する箇所、より深く説明をする箇所、注釈を入れる個所など三者三様の違いがあることが分かった。

これらの違いは、文章の量の違いや使用している単語・熟語の意味から推測するに、末松氏・ウェイリー氏・サイデンステッカー氏の三人が原作の『源氏物語』を読み、その中から彼らが大事だと思ったこと、『源氏物語』本質である思ったことが訳されたのではないかと考える。また、日本語と英語の違いから、翻訳するにあたり、本当は大事な個所なのだが、止むを得ず省略をした場面もあるだろう。『源氏物語』の世界観を壊さずに英訳を行うというのは大変難しいことである。今回は比較するだけで終わってしまったが、翻訳者三人が何故省略をしたのか、何故この単語で訳したのかなど理由をより深く考察できるようにしていきたい。さらに、『源氏物語』を訳すことにどういう意識があったのか、時代の要請という視点から考えたい。また、省略をした理由や単語・熟語選択においての理由が、日本人・欧米人の思想や文化などにどれくらい関係性があるかについても調べていけたらと思っている。

参考・引用文献

末松謙澄 『GENJIMONOGATARI』 1974 Rutland

By Lady Murasaki, translated from the Japanese by Arthur Waley. 『The Tale of Genji』 Modern Library
1960

Murasaki shikibu, translated with An introduction by Edward G.Sidensticker 『The tales of Genji』 1978

小西友七 [ほか] 編 『ジーニアス英和辞典』 (第4版) 2006 大修館書店

日本国語大辞典 (第二版) 小学館

新編日本古典文学全集 20 小学館

E.G サイデンステッカー著 安西徹雄訳 『源氏日記』 1980.3 講談社

伊井春樹編 『世界文学としての源氏物語 サイデンステッカー氏に訊く』 2005 佐久間書院

神作幸一編 『源氏物語の鑑賞と基礎知識 ①桐壺』 1998 至文堂